
君へ、自分を大切に

柊 亜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ、自分を大切に

【NZコード】

N5231D

【作者名】

柊 亜子

【あらすじ】

私とミヤビと彼、そして周囲の人々。ミヤビは何を思い、感じているのだろうか？そして私は？私とミヤビは何処に向かっているのか？

1（前書き）

女性という生命体に対して、高い理想像を掲げている方は落胆されるかと…

私、ミヤビはある事を境に流される事で生きている。流されるとは綺麗な言い方で、シビアな言い方をすれば何事も考へる事なく、その場の雰囲気に飲まれ漂い、何となく生きている。何となく生きても死なないのは、自分を自分でアヤメル勇気が無いだけだが…

ところで、ミヤビは本名ではなく呼び名。

本当の私の名前を知るのは両親と数人の友達、そして私が惚れてしまっている男だけ。

程度で。

その為ミヤビの世界は現在拡張し続けている。

ミヤビは、派手で華やかで露出狂で、男を喜ばせる事を目的としている。

所謂、愛人タイプ。

実際に愛人なのだが…

ミヤビは一人だけの男相手では息が詰まるらしく、

常に複数の愛人を掛け持ちしている。

男に消費され、振り回され、結局は傷つく自分いるのが分かっているのに、

ミヤビはこの流される生き方をやめられない。

一体どこに流されていくのか、行き着く先は何処なのか現時点ではさっぱり分からぬ。

それを考え始めると、ミヤビと私は先行きの霧の深さに頭痛と眩眩がして考える事をストップさせてしまう。

そんな時に私とミヤビは彼に出会った。

彼とミヤビはケータイの出会い系サイトで知り合った。

今迄私が生きていた世界では出会えない人間に会うリスク…それは使い方次第。

誤ればババを引く。人生ババヌキ。

勿論ミヤビにそんな事は無関係。

ただミヤビを知らない人と会う手段。

出会つた彼は好意を持った。

ただそれは…ミヤビではなく私に。

私はミヤビとして名乗つた人間に、一切私を出さない。

私の存在を知つている人間を増やす氣は全くないから。

何故、彼は私に気付いたのか？

私はミヤビとして完璧に振る舞つたはずだ…

そんな不思議な彼に出会つてから、少しづつ私とミヤビのバランスが変化し始める。

勿論、愛人として生きているミヤビは変わらない、変われない。

私を失望させ、疲れさせ、嫌悪感を与える続ける男達相手に、

ミヤビは笑顔を振り撒き、媚びを売り、愛人として振る舞う。

ミヤビは、スタイルがあらわに見える服を纏い、髪を結い上げ、他の男から注がれる卑猥な目を称賛と見なし、真っ直ぐ前を向いて歩く。美味しい料理や上手い酒を体に取り込み、高級とされている場所に出入りし、惜しみなく金を使う。

愛人として、どうやつたらミヤビに金をかけてくれるか？それがミヤビの興味ある事。最重要事項。新しいレストラン、新しいホテル、流行りの場所…別段に興味は無いがミヤビは金の掛かる場所が大好き。

他人と被る可能性があるブランド品にはミヤビは興味が無い為、食事が優先となる、結果として舌も肥える。

マズイ物、安い物は一切受け付けない。

そして私はミヤビの存在しない時に普通の会社員として働き始める。
私とミヤビのバランスの変化、私がミヤビに成り切れなくなつた
理由、私は彼に興味があるようだ。むろんミヤビには関係無い。

私は、小さい時から自分の外見にコンプレックスを感じていた。
狭い額、細い目、並びの悪い歯、そして内気な性格に隠れてしまつ、
表現が出来ない虚栄心。

赤面症で小学3年生から男の子とはほとんど話せなかつた。
完璧主義で融通が効かず、頭でっかち。

本は読む事は大好きだつたが、勉強はイマイチ。

両親供に公務員だったから馬鹿ではないはずだけれど…

特別に勉強出来る方ではなかつた。

おまけに音痴で運動も不得意。

ここまで来ると、なけなしの自信も無くなり性格も暗くなり周囲に
対して過度の被害者意識も強くなり…

悪循環にはまりやすいのは時間の問題。

もちろん、私は悪循環にはまり、直ぐにイジメの対象になつた。

女の子達にイジメられたのでそれ依頼、女は嫌い。

可愛い子や綺麗な子は特に。

幼いながらも世の中の不平等さを肌で感じた。

綺麗な女は価値があり、不細工な女は疎まれる。

分かりやすくも残酷な現実。

私は何とかこの状況から脱出したかった。

そんな焦る気持ちとは裏腹に私は何時しか高校を卒業していた。
気持ちだけはあつたのだが、結局は何もしなかつた。
何をしてよいのか分からなかつた。

気になる男の子はいたが告白も出来ず誰とも付き合わず。
辛うじて友達…と呼べる女の子が出来た事位か。

進学してからも私は変わらず…

周囲では彼氏が出来た、デート、キス、初体験…

そんな話ばかりが耳に入つくる。

こんな容姿の私は、誰からも興味を持たれず、いつの間にかオールドミスになっていくのか？

こんな気持ちは何時からだらう。

思い返せば私はミヤビになつてから早々に、
サイトで出会つた初対面の男と関係を持ち処女を捨てた。
ミヤビとしては、処女という価値を有り難がる男に売つてしまえば
よかつたと

今でも後悔している。

感想としては余りの痛さに相手をグーで殴り流血させた程度。
殴つた事は悪いとは思うが、

初対面の女を部屋に連れ込み、犯したのだから殴らても文句はある
まい。

もちろん接点はその一回。

私が処女だつた事を知るや否や男の態度は冷たくなつた。
私が処女喪失を盾に男に執着するとでも思つたのだろう。
だが私は余計なモノが無くなつてスッキリした感覺だけだ。
恋愛感情無くとも関係は持てる。
確信と少しだけの驚きと落胆。

それまで私が好きだつた男の子は、私がなかなか抱く事を私が許さ
なかつたので去つていつた。

二十歳そこそこの男の子からの誘いを散々はぐらかし、受け入れな
かつたから仕方ない話だ。

おまけに私は男の子と会つ時に下着にはかなり気合いを入れていた
のに…

私が一言「抱いて」の言葉を発していれば良かつたのだが。

私の外形に対する自信のなさが恥ずかしさになり、どうしても男の
子を受け入れられなかつた。

処女をあっけなく喪失してみて、男は女を抱く為に甘い言葉をいと
も簡単に使いまくり、最終的に女を抱けないとさつさと別の女を探

して去つていいくどうじよつもない生き物。男はただの雄だ。私の身体にのみ用のある生き物。その為に挨拶の如く「愛してる」等という言葉を使まくり、事が終われば全て忘れる都合の良い生き物。私はニヤビに囁いた。

ミヤビは、本当に色々な場所でミヤビを買つ男と会つてきた。

最初は新宿に事務所のあるデリヘル。

デリヘルは本番無。その分料金も安い。

だけど男達は入れさせる事を懇願する。

それを一々なだめすか事が面倒臭くなり、

それなら最初つから最後迄と割り切つて大塚のホテルに。

ホテルの仕事はデリヘルよりも全然楽だった。

客が終わる迄、笑顔を張り付け適当に演技さえしていれば良い。

基本的に受け身で問題無し。自分がサービスしなくて良いから楽だった。

おまけに店の看板として雑誌にも写真バンバン出ていたから、どんなに暇な日でも稼げた。写真指名の場合はまずチエンジされる事はない。
客がイメージと合わない女の子をチエンジ出来る権利を持つから女の子は外見が最重要課題。

チエンジされていたら時間も勿体ないし、何より女としての自信を傷つけられてしまい精神衛生上、非常によろしくない。

「チエンジ」この一言はかなりイタイ。

ミヤビの売りは顔と胸と脚。

ただし、一晩で多いと5、6回は風呂なりシャワーなりを使用するのでメイクはあくまでも簡単に直せる程度にナチュラルに。髪も白毛が中途半端に短かつたので部分ウイッグを使い、濡れても外せる偽ロング。

胸元は服の上からでも露骨に大きさと谷間が分かるような服を選び、脚元はもちろんミニスカートにヒール靴。これがミヤビの戦闘服。稼げる子、客を引っ張れる子は事務所の人間も可愛がり、我儘や融通も聞くようになり大事にされる。

シビアだから解りやすい社会、先輩後輩何て関係無。

その事務所に所属しているメンバーの中で密受け良いかどうか、た
だそれだけ。

ミヤビはどうも買つ男達にとつては忘れられない子らしい。その理
由は簡単、それはミヤビが感じやすい子を一貫して続けていたから。
男は自分の愛撫で感じ、イク等と連発している女に悪い気はしない
らしい。むしろ相性合つ等と前向きに解釈する。

笑顔でさえいれば、心の中で殺意に近い悪態着いても男は決して分
からない。

ミヤビは仕事中は完璧な女優です。

私はそんなミヤビが好きでもあり、嫌いでもある。

ミヤビの「機嫌良い時は私は何も余計な事を考へる事なく、楽しく時間を使い、外に出歩き、お金にも不自由しない。

逆の時は大変だ。人生そのものに嫌気がさし、外との接触を避ける為にベットから起き上がりない。

私が仕事を始めてからミヤビは私の休みの日に動くようになつたから、まだ私の仕事自体に支障はなかつたけれど。

だけど私は職場では周りの女達となかなか上手くいかなかつた、ミヤビの存在有無ではなく私は女という生き物が苦手だつた。

私よりも長く働いているという理由だけで何もない女、

他の女に媚びを売り上手く立ち回る女、

私は媚びを売る事も自分自身を謙遜させる事も一切しなかつたから可愛い毛はない。

職場でも陰口を言われイジメられるとは…年齢か環境は関係ない、女は自分が常に一番で居たいし周囲からもそう扱つて欲しい生き物。ただ幸いにも、選んだ仕事が技術系の客商売だつたからお客様に気に入られて指名されれば、それだけ私の立場は面白いように変わつた。客からの指名を取れれば立場は安定。住んでる世界は違うのにミヤビと同じルール。

私は職場の人間関係は不器用だが、働く事自体は好きだ。自分がした事で自分で喜んでくれる事は好き。

私は技術を身につけ更に上手くなれば私自身の必要性が上がる事が分かり、関われる分野も広くなる事を知つた。

私はこの技術の世界が好きになつた。技術を磨き、新しい知識を学び、それを客相手に実践して経験として身につけていく。やればやるだけ、自分のやる気次第で良い方に変化する。私とミヤビの共通点が一つ見つかつた。

ミヤビも私も、他人に必要とされている実感を欲しがる。

だから、自分よりもまず他人を気遣い周囲の目が気になつて仕方がない。だけど、自分よりも努力しない、能力ないと判断するとそれに大してはかなり冷たい。そこがミヤビも私も、損している部分。元々、敵を作りやすい特徴を持っているのだから…絶対に敵は少ない方が良いに決まってる。特に私はミヤビの存在する環境ならば許されても、許されない状況が多いから。そして段々、私はミヤビに戻つていつてしまつた。

職場という人間関係が嫌になり、ミヤビの方が生きやすい…

私は転職を繰り返し遂に出社拒否になり半年間家から出れなかつた。昼夜問わず寝ているか、TVをぼーと眺めているかのどちらか。食事もしない。

外出はミヤビが客との約束がある時のみ。

収入も生命維持に必要な食事という行為もミヤビが動けたから何とかなつた。

ミヤビが居なければ私は確実に死んでいた。

結局はミヤビを愛人として見る男という対象相手にしか、ミヤビも私も必要とされないのでどうか。

悲しいような虚しいような、でも客はミヤビに会えて喜び金を払う。私とミヤビ、二つの人格で一人の人間だけど必要とされているのはミヤビだけ。

私は彼とも距離を置いてしまつていたから、私は私の必要価値がわからなくなつてしまつた。だが、私が死んでしまうと、必然的にミヤビも命を落としてしまつので…ミヤビは私を巻き込んでの擬似恋愛相手を見つけてきた。

ミヤビも私も、他人に必要とされている実感を欲しがる。

だから、自分よりもまず他人を気遣い周囲の目が気になつて仕方がない。だけど、自分よりも努力しない、能力ないと判断するとそれに大してはかなり冷たい。そこがミヤビも私も、損している部分。元々、敵を作りやすい特徴を持っているのだから…絶対に敵は少ない方が良いに決まってる。特に私はミヤビの存在する環境ならば許されても、許されない状況が多いから。そして段々、私はミヤビに戻つていつてしまつた。

職場という人間関係が嫌になり、ミヤビの方が生きやすい…

私は転職を繰り返し遂に出社拒否になり半年間家から出れなかつた。昼夜問わず寝ているか、TVをぼーと眺めているかのどちらか。食事もしない。

外出はミヤビが客との約束がある時のみ。

収入も生命維持に必要な食事という行為もミヤビが動けたから何とかなつた。

ミヤビが居なければ私は確実に死んでいた。

結局はミヤビを愛人として見る男という対象相手にしか、ミヤビも私も必要とされないのでどうか。

悲しいような虚しいような、でも客はミヤビに会えて喜び金を払う。私とミヤビ、二つの人格で一人の人間だけど必要とされているのはミヤビだけ。

私は彼とも距離を置いてしまつていたから、私は私の必要価値がわからなくなつてしまつた。だが、私が死んでしまうと、必然的にミヤビも命を落としてしまつので…ミヤビは私を巻き込んでの擬似恋愛相手を見つけてきた。

擬似恋愛相手は横浜の会社経営者、ミヤビが見つけたからシガラミ
無い子持ち既婚者。

その人は私の父親の年齢に近かつたけれど、服装や話し方や内容は
かなり若く見えた。

その人も最初は私には気付かなかつたけれど…最後は私に恋をした。
私に気付いたのは、ミヤビが私を説き伏せて私を出したから。

その人がミヤビをかなり気にいつっていたが家庭も大切にしていたの
が分かつたから。

家庭を大切に出来ない男は駄目だ、まして子供がいるならば。
子供が居るということは一度は子供を幸せに育てる覚悟をしたとい
う証。

その覚悟をしても家庭を大切にしないのは、上り面の覚悟だつたと
いう事。

その覚悟を通せないのはこ_レミヤビともトラブルを起すからだ。
できちやつた婚も一人で仕組んでならば問題無いが、セックスの快
樂を男が求めた為に発生する場合も多いから。

勿論、それがきっかけで大切な家庭が生まれるのも事実だけど避妊
は男の義務、女も望まない妊娠をしたくないならばピル等の薬の知
識を知つておくべきだ。

モーニングアフターピルさえ飲めばほぼ妊娠しないし面倒臭ければ
低容量ピルの毎日の服用等。

産まれてくる子供に罪は無いし、母親以外の女にウツツを抜かして
いる事を気付かれる父親程馬鹿な男は無い。

経済力無いのにセックスの快樂ばかり追い求める男は稼ぐ能力が低
い為未来は明るくない。

何はともあれ、その人のおかげで私は知らなかつた世界を見た。

ミヤビは客と海外旅行には行かなかつた。

理由はパスポート。私名義で個人情報満載。

私は、ビジネスクラスでの移動やカジノの興奮も覚えた。
どんなに晩くなっても自宅返車で送らせる事、私の悩みや愚痴を話す事も。

でもその人は私を知つてから、プレゼントはくれたが一切金を払わなかつた。

その矛盾に気付いて擬似恋愛は終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231d/>

君へ、自分を大切に

2010年10月26日05時52分発行